富士市の歴史文化探訪

曽我伝説

勝川春英画「曽我五郎時宗、御所之五郎丸」（富士山かぐや姫ミュージアム蔵）

目次

表紙写真…曽我兄弟像（曽我寺）　裏表紙写真…曽我兄弟像（曽我八幡宮）

曽我兄弟のあだ討ち　2
曽我物語の成立　4
曽我物　5
浮世絵にみる『曽我物語』　6
市内曽我伝説マップ　11
曽我兄弟を祀る曽我八幡宮　12
曽我兄弟がねむる曽我寺　14
兄・祐成の恋人　虎御前にまつわる場所　16
曽我兄弟ゆかりの地　18
おすすめモデルコース　20
富士山かぐや姫ミュージアム　21

曽我兄弟のあだ討ち

歌川国芳画「建久四年五月廿八日曽我兄弟敵討之図」（富士山かぐや姫ミュージアム蔵）

鎌倉幕府によって編纂された『吾妻鑑』には、

廿八日　癸巳小雨降る。日中以後に霽る。子の剋、故伊東次郎祐親法師が孫子、曽我十郎祐成・同五郎時宗、富士野の神野の御旅館に推参致し、工藤左衛門尉祐経を殺戮す。（原文は漢文）

とあります。

この曽我十郎祐成と五郎時宗（致）兄弟が、工藤祐経を殺害するという事件が起きた背景には、後に編纂された『曽我物語』による脚色もありますが、一族の所領をめぐる複雑な人間関係がありました。

平安末期頃、曽我兄弟の先祖は、伊豆押領使（犯罪者の追跡などをする役職）として伊東に館を構えました。伊東に住んだ維職は、その地名から苗字をとり「伊東氏」を名乗るようになります。その後、子の維継や孫の祐隆の代になると伊東、宇佐美、大見に領地を持つ、大きな豪族となっていきました。

曽我兄弟の仇討ち事件までになる遠因は、伊東祐隆のとった行動にあります。祐隆の嫡男・祐家が早くに亡くなり、後妻の連れ子（実は隠し子）に主要な領地を譲り、伊東祐継と名乗らせ家督を継がせました。嫡男の子（祐隆の孫）・祐親には、新たに開発した河津のみを与えました。伊東氏の家督を継いだ祐継は四三歳で病にかかり、九歳の嫡男・金石を祐親に託して亡くなりました。

祐親は祐継の遺言通り、金石が一三歳になると元服させ「祐経」と名乗らせ、自身の娘と結婚させました。その翌年、祐親は、祐経を伴って京都に行き、祐経には、平重盛（平清盛の長男）に仕えさせ、そ

のまま都暮らしをさせました。

その間に、祐親は嫡男の三郎祐泰（祐通とも）に河津を譲り「河津」姓を名乗らせ、自身は伊東に移り住みました。祐親はうまく祐経を追い出し、元々伊東氏が支配していた領地を独占したのです。

このことに恨みをもった祐経は、祐親の暗殺を計画します。

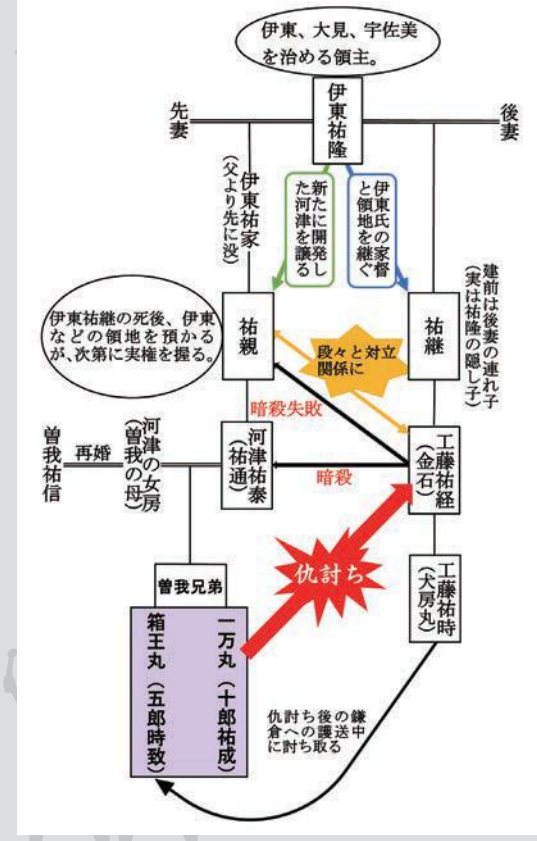
しかし、肝心の祐親は暗殺できず、その子、河津祐泰を暗殺してしまいます。祐泰には、当時五歳の一万丸（十郎祐成）と三歳の箱王丸（五郎時致）という二人の子がいました。未亡人となった兄弟の母は、幼い子を連れて曽我（現小田原市）の領主・曽我祐信と再婚しました。このため、兄弟は「曽我」姓を名乗ることになります。

そして、成長した曽我兄弟は、建久四年（一一九三）、鎌倉幕府の将軍である源頼朝が富士の裾野で大がかりな巻狩りをおこなっていた五月二八日、富士野の神野（現富士宮市）にいた親の仇の工藤祐経を殺害し、あだ討ちを果たしました。

『曽我物語』関係地図

坂井孝一著『曽我物語の史的研究』より加工・加筆

曽我兄弟をめぐる人間関係図



曽我物語の成立

『曽我物語』上、下（富士山かぐや姫ミュージアム蔵）

『曽我物語』とは、曽我兄弟が工藤祐経を殺害した事件を題材として編纂された軍記物語のことをいいます。作者は明確にはわかっていませんが、鎌倉時代後期から室町時代前期に成立したとされています。

事件後、女性の語り部である遊行巫女などによって、事件のいきさつや兄弟の生涯などが語られるようになりました。これを「曽我語り」といいます。

その後、「曽我語り」は東国の信仰の中心である箱根権現・伊豆権現の僧侶たちによって、「報恩」（恩にむくいること）など仏教の教えの題材として人々に広められていきました。やがて文字化されて『曽我物語』として成立しました。

『曽我物語』には多くの異本があり、代表的なものとして「真名本」と「仮名本」があります。

「真名本」は、初期に編纂されたもので、漢文で書かれています。僧侶たちによって編纂されたので、仏教思想に基づく「報恩の物語」であることが強調されています。

その後、室町時代中期頃に「真名本」を原本として、仮名まじりの和文体で書かれた「仮名本」の『曽我物語』が成立します。仮名まじりのために読みやすく「流布本」とも呼ばれます。

曽我物

『曽我物語』は、幸若舞や謡曲、浄瑠璃、歌舞伎など様々な芸能の題材になり大衆化されました。これらを総称して「曽我物」と呼びます。

江戸時代には、歌舞伎の世界で曽我物が大人気になりました。歌舞伎での最初の作品は、明暦元年（一六五五）八月に披露された山村座の「曽我十番斬」といわれています。貞享五年（一六八八）三月には、森田座の「古今兄弟曽我」において、市川団十郎が五郎を演じました。団十郎は、荒事（荒々しく豪快な演技）の型を作り人気を呼びます。その後も「兵根元曽我」や「傾城嵐曽我」など曽我物は大当たりしました。

その結果、江戸三座（中村座、市村座、森田座）が、享保年間（一七一六～一七三六）以降、正月に揃って曽我物を演じる習慣が明治初期まで続きました。曽我物は、御霊信仰（横死した兄弟の霊の祟りを鎮める信仰）と結びついたということと、歌舞伎界の人気者・市川団十郎が演じた弟・五郎の荒事演出によって、一年の平穏を祈る年頭の吉例行事となったと考えられます。

「九世市川団十郎・曽我五郎」
（富士山かぐや姫ミュージアム蔵）

「吉例曽我礎」（富士山かぐや姫ミュージアム蔵）

浮世絵にみる『曽我物語』（曽我物語図会 抜粋）

「曽我物語図会 二」

工藤祐経は、宇佐美・久須美・河津の三つの所領を伊藤祐近（伊東祐親・曽我兄弟の祖父）に奪われた。

そのことを恨み、家来の八幡三郎と近江小藤太に命じて、赤澤山の頂上から柏ケ峠の椎の陰から祐近（祐親）の子・祐安（河津三郎祐通）を射止めた。

河津三郎の死後、その妻は二人の幼子を連れ、曽我太郎祐信に嫁いだ。

ある年の秋、兄・一万丸が雲間を渡る五羽の雁を指し家族にたとえ、実の父のいない悲しさを語り、弟・箱王丸に、無念の最期を遂げた河津三郎こそ実の父だと告げる。兄弟は、仇討ちすることを誓う。

「曽我物語図会 三」

「曽我物語図会 六」

箱王丸は母の計らいで出家させるため箱根山で修行中、源頼朝が参詣し、工藤祐経も供としてやってきた。

祐経自ら赤木造りの短刀を箱王丸に贈り物として与えた時、箱王丸はわずか八歳にして、「天にいる父の仇、兄・一万丸と共に成人したら討ってやる」と心に誓う。

「曽我物語図会 七」

箱王丸もそろそろ成人なので、近々、出家させたいと母が言っていた。

箱王丸自身その話を聞き、出家させられては父の仇を討つという願いがかなわないと思った。

箱王丸はある夜、寺を忍び出て、曽我中村（現小田原市）にいる兄・十郎祐成のもとへ急いでいった。

箱王丸は箱根を下山し、兄祐成とひそかに北条の館に行き元服を頼んだ。北条時政は早速承知して箱王丸の烏帽子親となり、曽我五郎時致と名乗らせた。

北条時政は、兄弟と親戚関係にあり、烏帽子親としては最適であった。

また、「時致」の「時」の字は、「時政」の字を一字いただいたものである。

「曽我物語図会 八」

「曽我物語図会 十四」

相模国の大磯宿（現神奈川県大磯町）本陣の娘・虎御前は、街道一の美女で有名であった。兄の曽我十郎祐成は、その虎御前と深く結ばれた。

祐成は、曽我中村（現小田原市）から、はるばる虎御前のもとへ通っていた。

そして、紀友則（貫之）の「恋しい思いに耐えかねて、愛する人のもとへ出かけて行く」という歌を詠んだ。

「曽我物語図会 十八」

相模国化粧坂（現鎌倉市）に少将という舞姫がおり、大磯の虎御前と並んで街道きっての美人だった。

曽我五郎と深く結ばれていたが、源頼朝の重臣・梶原源太も心を寄せており、しばしばここに通っていた。

ある日、梶原が先に来ていることを童女に告げられた時致は、手紙を書き童女に託し、少将のもとを去った。

源頼朝が富士の裾野で御狩を催し、工藤祐経もそこへ行くと聞き、祐成と時致の二人は長年の恨みをはらす絶好の機会と富士の御狩に出立することを計画した。

庭に茂る夏草を見て、普段は気にもとめなかったが、こんな草木といえども、これが見納めと思うと名残惜しいものだと兄弟は、故郷との別れを惜しんだ。

「曽我物語図会 十九」

建久四年（一一九三）五月二八日、亥の刻（午後十時頃）を過ぎたころ、兄弟は敵の仮屋へ忍び寄ったが、戸口は固く閉ざされ入ることができなく、どうしたものかとためらっていた。

すると思いがけなく戸が開いて一人の女性が兄弟を招き工藤の寝間を教えてくれた。彼女は大磯の舞妓で虎御前に恩を受けた者だという。

「曽我物語図会 二十二」

「曽我物語図会 二十三」

兄弟はかろうじて工藤祐経の床に忍び寄って枕元に回り立って、
「祐経殿十八年の恨みの刃、請け取りたまえ。」
と叫ぶと、祐経は
「請けて立とう。」
と起きようとしたところを、初めは祐成が太刀を振り下ろし、次に時致が太刀を振り下ろした。兄弟は、祐経を討つことができ喜んだ。

「曽我物語図会 二十四」

祐成・時致の二人は、仮屋の外へ出て、親の仇である工藤祐経を討ち遂げたことを大声で叫ぶと、我先に兄弟を討って手柄にしようとたくさんの勇士が駆け出て来た。
しかし、五月雨と暗闇で視界が悪いことを利用して、二人は、隠れたり現れたりしながら、三百人あまりに手傷を負わせ、五十人あまりを討ち取った。

「曽我物語図会 二十五」

兄・祐成は、平家追討で数々の武功を挙げている伊豆国出身の仁田四郎忠常と渡り合い、火花を散らしながら戦った。
ついに運がつきたか、祐成の太刀が鍔の根本から折れ、忠常に討たれてしまった。
この時の祐成の年齢は二十二歳、たぐいまれなる勇壮な武士の最期は、とても惜しまれるものであった。

「曽我物語図会 二十六」

時致は虎が荒れ狂うように敵を切り散らし、源頼朝の近くにまで進んだ。五郎丸という怪力で有名な男が、女の姿に化けて後ろからおそいかかり捕えられた。

工藤祐経の跡継ぎの犬房丸によって鷹ヶ岡（現鷹岡と推定）で斬られた。生年二十歳、兄弟は裾野の露と消えたが、名は富士ケ根（富士山）と共に高くその誉は世に長く伝わった。

「曽我物語図会 二十八」

十七歳の化粧坂の少将は、深く思いを寄せる時致が、一首の歌を残して亡くなってしまったので、髪を切って「世を捨てる身でもなお思い続けるのは、問うに問われぬ情けからでございます」と歌をよんで化粧坂を出て行った。

その後、尼として仏の道に生きていると、虎御前の尼が庵にやってきて共に信仰の道を歩んだという。

「曽我物語図会 二十九」

虎御前は祐成の形見の着物を見ては悲しみ、兄弟の霊をなぐさめるため、箱根に登って出家した。

二人が命を落とした富士の麓を訪ねると、涙が止まらず、「お二人が露と消えてしまった後に来てみれば、ススキの先に秋風が吹き心さみしい風情ですよ」と歌をよみ、各地の霊場をめぐり七十余歳の大往生を遂げたという。

※「曽我物語図会」はすべて富士山かぐや姫ミュージアム蔵

市内曽我伝説マップ

☆お願い☆

史跡には必ずしも駐車場があるわけではありません。
近隣の公共施設等に駐車する場合は、必ず施設の管理者に許可をいただいてください。

曽我兄弟を祀る 曽我八幡宮

曽我八幡宮

この神社には、応神天皇と曽我兄弟が祀られています。神社が所蔵している「曽我八幡宮略縁起」には、建久八年（一一九七）、曽我兄弟の親の仇討ちの意志に感心した初代鎌倉幕府将軍・源頼朝が、家臣の岡部泰綱に命じて建てたといわれています。

天文年間（一五三二～一五五五）に武田、今川、北条の三氏の戦場になったため神社は焼けてしまいました。江戸時代になり、慶長一四年（一六〇九）に、関東地域の検地や河川工事に実績があった関東代官の伊奈備前守忠次が検地のため、この地に来た時に、神社は再建されたとされています。

その後、天保一一年（一八三一）雨宮守弘が社殿を現在地に移しました。この神社には、奉納された絵馬や「曽我八幡宮略縁起」の版木が残されています。

また、雁をみて父をおもう幼い兄弟像（裏表紙写真）が、境内にあります。

曽我八幡宮略縁起版木
（曽我八幡宮蔵・富士山かぐや姫ミュージアム寄託）

●久沢局

鷹岡中学

現在の念力橋

念力橋

五郎の首洗い井戸

仇討ち後、弟の五郎時致は鎌倉へ連れて行かれる途中、工藤祐経の子・犬房丸に首をはねられました。その首をこの井戸で洗ったと伝えられています。現在は水が枯れていますが、当時は水があり、「念力水」と呼ばれていました。近くには念力橋と呼ばれる橋もあります。

五郎の首洗い井戸

厚原中通り

凡夫川

●一乗寺

●曽我八幡宮

曽我兄弟の絵馬
（曽我八幡宮蔵・富士山かぐや姫ミュージアム寄託）

曽我兄弟がねむる曽我寺

曽我寺（鷹岳山福泉寺）

曹洞宗のお寺で、境内には曽我兄弟のお墓があります。十返舎一九の『東海道中膝栗毛』の中に、「曽我兄弟の石碑（お墓）」を参拝したことや、江戸時代の絵図に「曽我道」（一九頁参照）があることから江戸時代には、東海道を旅する人たちの名所として参詣したと考えられます。

正式には、「福泉寺」と言いますが、曽我兄弟がねむる寺として人々に「曽我寺」の名で呼ばれています。

本堂には、兄弟の木造や位牌が安置されています。かつては、仇討ちを果たした、五月二八日の近くの土日に、曽我兄弟の供養祭が盛大に行われていました。今でも御子孫や関係者によって供養が行われています。

曽我十郎祐成（兄）木造

曽我五郎時致（弟）木造

姫宮神社（ひめのみやじんじゃ）

この神社は、弟の五郎時致の想い人、化粧坂の少将を祀っています。時致は、化粧坂の少将に想いを寄せていましたが、源頼朝の有力な御家人・梶原源太景季に権力によって奪われてしまいます。

時致は、化粧坂の少将のことをあきらめ去る時に、歌を残していきます。その歌をみた化粧坂の少将は、文を顔に押し当てて涙を流したといわれています。

露とのみ消えにし跡を来て見れば
尾花がすゑに秋風ぞふく
（虎御前）

捨つる身になほ思ひ出となるものは
問ふにとはれぬ情なりけり
（化粧坂の少将）

虎御前、化粧坂の少将の歌碑

曽我兄弟の墓
左：曽我五郎時致　右：曽我十郎祐成

兄・祐成の恋人 虎御前にまつわる場所

玉渡神社（たまわたりじんじゃ）

この神社は、兄の曽我十郎祐成（すけなり）の恋人・虎御前（とらごぜん）が祀られています。虎御前は、仇討ちから三ヶ月経ち兄弟の霊を慰めるためにこの地を訪れました。疲れて小さな祠の前で休んでいると、二つの火の玉があらわれ、虎御前はそれを兄弟の魂だとおもい、小さな祠にこもって念仏を唱えて兄弟の冥福を祈ったとされています。

その姿をみた村人達が、後にこの地へ玉渡神社を建てて虎御前を祀ったといわれています。

虎御前（とらごぜん）の腰掛石（こしかけいし）・がっかり橋

曽我兄弟が仇討ちを遂げるために曽我の里を旅立った後、虎御前は兄弟の安否を心配して、後を追いかけました。

虎御前がこの地に差し掛かった時、仇討ちは果たされ兄弟は命を失ったことを知り、その場で泣き崩れ、近くにあった石に腰を下ろしたといわれています。写真（次頁）の左下にある石が、腰掛石だと伝えられています。

この石に柄杓で水をかけると、女性特有の病気が治るという話があり、お参りする人が多くいたといわれています。

また、虎御前が兄弟の死を知った時、橋の上にいたと伝わり、この橋のことをがっかり橋と呼ぶようになりました。

曽我寺
愛鷹神社
碧雲寺
厚原西
富士北局
玉渡神社
玉渡神社
大貫線
東名高速道路
がっかり橋
虎御前の腰掛石
本蔵寺
伝法保育園
現在のがっかり橋
伝法沢川
虎御前の腰掛石
伝法沢橋
大貫線
伝法沢

曽我兄弟ゆかりの地

吉原第二中学校

十王子神社

曽我堂

妙延寺

善得寺公園

第二保育園

曽我堂（そがどう）

ここには弟・五郎時致が祀られています。昔この近くにあった善得寺の住職・竺帆和尚の前に、成仏させて欲しいと時致の亡霊が現れました。

住職は、時致の木像を彫り、祠をたてて供養しました。祠は元々善得寺の境内にあったと考えられますが、現在では、十王子神社の境内に移されています。

新富士駅

東海道新幹線

浅間神社

浅間神社

柳島局

養雲寺

柳島公園

福泉寺

富士由比バイパス 1

福泉寺（ふくせんじ）（柳島）

富士市内には、「福泉寺」という名前のお寺が、曽我寺の他に天間と柳島にあります。

虎御前は、亡くなる直前に兄弟の供養のため、使いのものに薬師如来の像を富士の麓にある「福泉寺」に届けるようにお願いしました。しかし使者は、間違えて柳島の福泉寺に薬師如来を届けたと伝えられています。

曽我の馬蹄石

源頼朝が行った富士の巻狩りに宿敵・工藤祐経が参加していることを聞きつけた兄弟は、祐経を追いかけて、鷹ヶ丘（現鷹岡）まで来ました。兄弟は、道端にあった石に馬の足をかけ、祐経がいる上井出（現富士宮市）の方をにらんでいた時に、この石に馬の蹄跡がついたといわれています。

五郎の首洗い井戸の近くにある石も馬蹄石といわれています。

また、この地域には、仇討ちに向かう途中に兄弟が腰をかけたという「曽我の兄弟石」もしくは「曽我の腰掛石」といわれる石があったという伝承があります。

曽我道

江戸時代後期に富士山への登山ルートや名所が描かれた「駿河国富士山絵図」に、「曽我道」の記載があります。

その道は、東海道の本市場の東側を北に向かい、山橋を通り、保壽寺の東側に出ます。その先には、「曽我寺」や「兄弟墓」などが紹介されています。

江戸時代、東海道を旅する人が街道をそれて、曽我兄弟の墓に参った話もあり、その道を「曽我道」と呼ぶようになったと考えられます。

曽我道推定地図
「明治20年測図２万分の１地形図」より

駿河国富士山絵図（部分）

駿河国富士山絵図
（富士山かぐや姫ミュージアム蔵）

おすすめモデルコース

JR入山瀬駅 → 曽我寺 → 虎御前の腰掛石がっかり橋 → 玉渡神社 → 曽我八幡宮 → 五郎の首洗い井戸 → 念力橋 → 姫宮神社 → JR入山瀬駅

コース 6.5㎞（約130分）

富士山かぐや姫ミュージアム（富士市立博物館）

アクセスマップ

富士山に還るかぐや姫の物語を展示する、世界でただひとつの博物館です。ここで富士の歴史などについて知識を深めてから伝承の地を訪ねれば、物語の世界が一層広がります！

【開館時間】
４月～10月：午前９時～午後５時
11月～３月：午前９時～午後４時30分
【休館日】
月曜日（祝日の場合は開館），祝日の翌日
12月28日～翌年１月４日
【観覧料】
無料
【お問い合わせ】
〒417-0061　静岡県富士市伝法66-2
TEL 0545-21-3380　FAX 0545-21-3398
e-mail　museum@div.city.fuji.shizuoka.jp
URL　http://museum.city.fuji.shizuoka.jp/

〈お問い合わせ〉
富士市 市民部 文化振興課 文化財担当
〒417-8601 静岡県富士市永田町1-100
TEL 0545-55-2875 FAX 0545-53-0789

平成29年３月発行
令和元年８月増刷